

夜行、肅々……

ヨリソとトマリの見合いは奇怪な形式で行われた。トマリの屋敷の奥の部屋で行われた。始まりは十九時を回り、月光を廃するためにふすまは閉ざされ、蝋燭の火の中で行われた。山代家はトマリと母親が並び、後から河村方のヨリソと付き人、母親がやってきた。ヨリソの格好は一層奇怪だった。裾の長い襦袢を羽織り、西欧のような覆い布を身につけていた。蝋燭の火だけでは彼女の顔は見えるはずもなかった。トマリは毅然と、しかし力のこもらない姿勢で佇み、山代家の母はヨリソに被り物を外すように促した。付き人は近寄り、ヨリソの取った覆い布を受け取った。ヨリソの顔が蝋燭であらわになつた。白く鼻の通つた顔立ちだった。ヨリソはじっと視線を机に落とし、手を重ねて固まっていた。トマリとその母親は彼女を見つめ。ヨリソの母親が経緯を語り始めた。

ことの始まりはよりそが九つの時だった。日の差す庭の中で彼女は吐血した。付き人が駆け寄ると、よりその肌は熱くほてり、まるで日の光に焼かれるようにして爛れ始めていたのだという。それからよりそは日の光から避ける日々を費やした。よりその部屋のふすまは常に閉ざされ、給餌も速やかに済まされ、夜でさえも、月の出ない、曇り陰りのある日にのみ、庭への外出を許された。閉ざされた暗い部屋で書を取り、縫い物をして、それを続けて八年経ち今に至る。

トマリの家の小さな一室で、蝋の火に薄ら炙られながら、両家の見合いは行われていたが、それもはや既に決まりきっていた茶番だった。

トマリは山代家の次男として生まれ、さして期待もされずにのうのうと過ごしてきた。というのも、長年である与四郎が秀でており、跡継ぎとして申し分なく、誰もが彼を認めていた所以だった。脚光を浴びずに育つたトマリは、ずっと奥に潜み暮らしていたよりそこに秘めた親近感を感じていた。

二人の視線があつたのは、縁談が始まって一時間もすぎた頃、親同士でつまらぬ談義で花を咲かせていると、よりそはトマリに真っ直ぐ視られていることに気づいた。うっかりその視線上に入り、すぐ引っ込めるが、その線が揺るぎないことに気付くと、恐る恐る、今度は自らその線の上に身を出した。

トマリはよりその肌の白さから憂いを計り、よりそは数年ぶりに見る家族以外の人様の人となりを計った。それから左の鼻筋に蝋燭の火の光の刺を感じていた。それからトマリは白湯をと立ち上がり部屋を後にし、その後すぐによりそが後を追った。廊下で二人は立ち止まり、再び目を合わせた。

「このぐらいの光は大丈夫なのか」月の隠れた陰気な光だった。

「この程度であれば、平気です」会話はそれで終わった。二人で茶を沸かし、無言でまた部屋に戻った。道中、トマリは独り言とも会話ともつかぬ言葉を残した。

「あまりもの同士、よろしくやろう」よりそはその言葉の意味を理解できていた。軽く頷いて、あまりもの同士結ばれる。

それから三日後の朝方、今度はトマリがよりその家へ訪れた。よりそが伏せているという話を聞いてのことだった。門をくぐるとすぐに、二人の子供が遊ぶ声を聞いた。庭に目を向けると男の子と女の子が見えた。そのまま戸を叩くと、付き人が家から出てきてトマリを入れた。

付き人が連れて行ったのはふすまの閉ざされた部屋だった。付き人がふすまを開くと、奥に布団が敷かれ、よりそが横になっていた。小さな部屋に光が入るのを感じて、よりそは起き上がりその元を見た、トマリの姿を確認すると焦って身体を起こそうとするが、トマリはそれを止めた。

付き人がふすまを閉めるのを見届けてから、トマリはよりその布団の側であぐらをかいた。

「具合が良くないのか」

「よくあることなので気にしないでください。休めばすぐに治ります」とはいうが、いやにか細い声だった。よりそは布団の裾をしっかりと握り、目だけを覗かせてトマリを見つめた。トマリはふすまの白さから放たれる柔らかな光を見ていた。

「この光もだめなのか」より祖はうなずき、布団から手を覗かせてトマリの後方を指差した。その示す光をトマリを見ると、ふすまの一部分が実際輝き、その光はふすまを貫通してトマリの身体を刺していた。光は小刻みに、不自然な動きをしていた。トマリが立ち上がり、ふすまを開けるや否や、子供がわっと声を上げてそれぞれ別の方向へ走り去っていった。手には鏡が握られていた。それからふすまを閉めた。

「つまらない悪戯だ」

「申し訳ございません」

「弟と妹か」

「兄の子らです」それでなんとなく合点がいった。よりそは反論のしようにもできないようだった。

「まごうことなく、あまりものだな」

「なぜトマリ様はこちらにいらしたのですか？」

「家は兄が牛耳ってるから居場所がないのさ。だからいつも外を出歩き遊びまわっている」
しばらく沈黙にふけた。外は晴れ、鳥の声を一つずつ伺い、畳に映る光の映りゆく様をトマリは見つめていた。よりそは未だ二度しか会ったことのない、許婚の顔の表に映る情の様を測ろうとした。遠くで付き人が子供を叱りつける声が聞こえた。

「ずっと遊びまわっていては困ります。妬いてしまうかもしれません」ふっとトマリは笑い、影が奥に失せた。

「家さえ出られたらしませんよ、今の家さえ出られたら」そう言うと、今度はよりそが塞ぎ込んでしまった。よりそはただ天井をまっすぐ見ていた。

「この家さえ出られれば……」そこまで言って飲み込み、その後をトマリが促した。

「この家さえ出られれば、二人とも自由になれるんでしょうか」良くない風がふすまに当たるのが聞こえた。トマリは彼女の目の縁を見つめた。

「……一つ頼みがあるんだが……きつと先のことにはなるが……結婚したら俺を殺してくれよ」一層沈黙が深まった。

「それは……」

「いや、傲慢だな、気にしなくていい」よりその布団の隣には洗面器があり、その中に水がなみなみと入れてあった。葉のような包装もあった。

「これ、一つどうぞ」と言ってトマリは飴を受け取った。

「ハツカの飴か」

「ええ、特別なものではありませんが、これを舐めていると少し落ち着くんです。症状が」

「そんな大事なものの受け取れない」返そうとしたが止められた。

「いえ、お近づきの印です。いつか二人で自由になれるように、願いを込めて」今度はトマリが黙る番だった。

山代家はトマリの兄、与四郎が全てを掌握していると言っても過言ではなかった。トマリの縁談も、トマリを家から追い出そうという、与四郎に心酔している母の腹づもりだった。そのようなやりとりは今に始まったことではなかったもので、今更抵抗するでもなく、トマリは従っていた。

食卓は与四郎と母とトマリが食べ、与四郎の妻が支度した。トマリは終始無言で食事をし

た。

「お前、この前会った女はどうだったんだ」

「私にはもったいないぐらいの方でした」こんな具合に、何か問われない限り、泊まりから話すことはなかった。

「聞いた話だが、小難しい病気を持っているんだってな」

「ええ、まあ、そう伺いました」

「お前もバカな奴だなア、そんな男の足を引くような女にもつたいないも価値もあるものか、それともお前ぐらいのやつにはふさわしいとわかってるのか？」忍ぶようにして笑ったのは与四郎の妻、そして母だった。

「そのような女、社会に出してはなりません。こいつが引き取るのが社会貢献というものです。こいつが今まで情を見せたことがおあり？女に欲すら抱かないのであれば。あの女にお似合いね」三人とも笑い、トマリはひたすら食事を進めた。

「こないだあの女の見舞いに行ったんだろう？えらい献身な奴だなア。お前がそうやって他人を気にするとは、よっぽどだな。何故見舞いなんざ行ったよ？」トマリが手を止めたが、しかし目は依然として皿に据えており、ただそれだけだったが、胸中は他の人間を置き去りにしていた。

「家に金さえ落とせば文句もないさ」鼻で笑って、夜は老けていく。

食事を終えて自室で本を読んでいると、与四郎の妻がトマリを呼んだ。玄関に行くと、寒そうにしているよりそがシャンと立っており、帽子を深めに被り玄関の光を防いでいた。

「先日のお礼を直にしたかったもので……」愚直だと思った。だがそれ以上に実直だった。

後ろで与四郎の妻が鼻で笑ったのを聴いて、トマリはすぐに外套と帽子を手に取った。

「わざわざここに来ることはないだろうに。もう遅いから私が送ろう」サツとよりその方に手を回して家を出た。しばらくは二人とも無言だった。

「怒っていらっしゃいますか？粗相な姿を家の方にお見せしてしまいました」

「怒ってはいない、ただ、病み上がりにもう無理をすることもない」冬の夜道の寒さを訳に、よりそは泊まりに身を寄せた。トマリはしっかりとよりそを捕まえ、どこへも行かぬように同じ歩幅で歩いた。

「こうやって外を出歩くのも久方ぶりだったんです。それも一人で。だから、トマリさんのおうちの光を見るまで心細かった。それ以外の光は私を焦がすだけだから」しかしその光はトマリを焼いていた。それは言わずに、肩を抱く手に力がこもった。

「自分でも愚かなことをしたってわかっています」追及しようとして、トマリはやめて他の気になることを尋ねた。よりそが気を落としていたからである。よりそは少なからず、トマリの怒りを後ろめたく感じ、反省の色があったので、追求するのも酷だと思った。

「あなたは、これからどうしたいんだ」

「……縁談が上手く固まれば良いと思っています」

「そういうことを聞いているんじゃないか」語気が強くなってしまい、少し留めた。

「これからどうしたい」

「……私は、トマリさんと女夫になれたらと思っています」

「まだ少ししか知らない男なのか。縁談も関係なくか」

「はい、私たち二人以外の全ては関係なく」

家の明かりは減っていった。道につられてトマリの中にも黒黒とした考えが広がっていた。よりその家に着くと、やっと二人は面と向かい合った。よりそは最後に何かを言い淀み、手を取り淀み、仕舞いにはぎこちない会釈で別れた。トマリの帰路は行くより冷えていた。

家に戻ると与四郎が調理場で茶を飲んでいた。下に目を落とし、何かと思うと、蟻を指で焦らして弄んでいた。その後ろを通って、座敷に上がった。それからふと、与四郎の背中を振り返った。

殺そうと思った。誰もいなかった。与四郎は警戒すらしていない。脇に包丁が置いてある。今が格好の機械だと直感で理解できた。少しでも思ったが最後、刹那をすぎた後はトマリの身体中にその殺意が充満した。

与四郎は茶を飲み終わるとゆっくり振り返り向いた。後ろにはいつもの穏やかに飼い殺された表情のトマリがいた。わざと肩をぶつけて寝床を戻っていったが、トマリはそれから十分ほど立ち尽くした。水場には潰された蟻が残り、調理場の隅から影が深まり、やがて日付が超えた。

それから一週間も経った後、トマリはよりそに日中の外出を提案した。よりそ自身はためらったものの、母親は二つ返事で了承した。もはやよりその居所はトマリへと変わりつつあった。

トマリが家へと向かうと、付人がよりその準備をしていた。頭を頭巾のようなもので覆い、裾の長い羽織りを纏って日傘を準備した。歩いて十分ほどの公園へと向かった。冬にし

ては気温の高い、過ごしやすい気温だった。よりそは最初は苦しそうにしていたもの、少しずつ慣れていっている様子だった。公園に着くとすぐに、木陰の下の腰掛けに座って息を漏らした。

「具合は大丈夫なのか」

「ええ、縁談をしてから少しずつ、克服しようと頑張っているんです」

「耐えられるのか」

「遮断さえすれば我慢はできます」公園では子供たちが声を上げて遊んでいた。それらを眺めるだけで二人は多くの時間を費やすことができた。

「公園に来たのはいつ以来だ」

「幼い頃に一度きり。それ以来です。いつかは思い出せないぐらいの小さい頃に」

「兄がよく私を打ちました」

「今はどうなんだ」

「公園には行かなくなりました」不意に避けられたことを悟ったが、トマリは言及しなかった。

「子供は好きか」

「ええ、女の子は好きです」

「お前が女だからか」

「さあ。どうでしょう。女じゃなければ私ではないので、それ以外のことは想像できません」子供の喧騒が響いていた。木漏れ日はよりその日傘にまだらの模様を落とし、日傘はよりその影を纏わせている。木々が揺れるたびに傘も揺れた。模様が揺れても表情は揺らがなかった。トマリはよりその横顔を綺麗だと思ったが、言わなかった。木が揺れて傘の影からはみ出たよりその手に光を落とし、その身を焼いた。よりそは視線を少しも動かさずに、そのままだった。トマリはよりその手に己の手を重ねて光を代わりに受けた。その光はトマリを焼く事は愚か、痒くも温かくもさせなかった。代わりに手のひらは優しく焼かれていく。

「逃げたいとも思わないのか」よりそが答えるのに時間はかかった。

「思いもしなかったです。不可能な事だと思っていたので」

遠くで子供が戯れる様と、さらにその向こうの背の高い木々が生い茂る様の間の空の、冬の陽だまりを見つめた。目線の指す方向はわかるが、言葉の先の置きどころ、そして二人の終着点は慎重に見定めていた。

「これはただの例えで、もしもの話だが、もし逃げられたら何をしたい」よりそは手が重な

ったまま、静かに眼差しを返した。

「……二人でいられたら、それ以外は多く望みません」日が沈む前に家に送った。これから彼女の時間なのに、トマリは一人の帰り道を一人で思慮にふけて歩いた。

それから数日後、トマリは一人でその公園に行った。腰掛で一人、特に何もせずに一日を費やした。夕暮れ、夜の口、斜光を浴びて家に着いたトマリはまず、与四郎以外の誰もいないことを確認した。それから調理場の酒瓶を取った。赤く照る畳に影が刺す。肌を刺す寒さに床が軋む。階段を登ると四つの戸が廊下を挟んでいる。右の手前がトマリ、左の奥が与四郎の部屋だった。トマリは迷わず奥に進み、左の戸を音もなく開いた。

与四郎は寝ていた。夕方に寝るとは良い身分だと思いつつも、表には出さなかった。トマリは与四郎を真近で見下ろしながら、顔を観察した。流石に血が繋がっているからか、二人はよく似ていた。見慣れた顔だ。何も知らず感ぜずに眠っている。そのままの殺意で顔に思いつきり酒瓶を叩きつけた。

トマリがよりその家に着いたのはそれから一時間も経っていないかった。家の前に着いた途端、様子がおかしいことに気づいた。食事をするのが聞こえる所々、破滅的な音が聞こえた。玄関から入らずに、裏から回っていった。微かな音を辿ると、よりその部屋にたどり着いた。音を殺してふすま開いた。無音で部屋に光が刺した。

部屋の音が隙間から氾濫した。よりそのすすり泣く様、絹が擦れて暴力的に畳に身体が擦れる音、折檻を繰り返した。そのままトマリは場を乱し、よりその手を引いて玄関に向かった。道中、食卓の脇を通過し、その場のものは顔を出して二人を何かと見つめたが、トマリは歩みを止めなかった。

そのまま足早に家を出て、トマリは手を引いたまま毅然と歩き続けた。

「待ってください、これからどこに向かうんですか」

「兄を殺した。二人で逃げよう」

それから駅までそう遠くなかった。電車が来るまで三十分ほどあった。切符を買ってから蕎麦屋に入った。二人は終始黙っていた。日が沈んで列車がやってきた。人影は少なく、二人で四人掛けの席に座った。周辺はとても静かだった。トマリはこの前の数時間に殺人を行われていたことを知らない静けさだと思った。トマリは誰にも気づかれないことを寂しくも思った。俺の殺意を認識する人間はどこにもいない。たった一人、認識している彼女は目

の前で弱々しく啜り泣いていた。サイレンが鳴って扉が閉まり列車が動く。

車窓の向こうでは山の縁が夕日を帯びていた。心許ない街灯が夜に飲まれかけ、やがて車内の光に埋め尽くされる。よりそは身体を丸めて震えていた。窓から冷気が伝わってくる。トマリが上着をよこし、は折らせると落ち着いたようだったが、視線はいまだに定まらず、床の木目を泳いでいた。

列車の中は赤色を欠いて冷たい色に満ちていた。誰もが穏やかな表情で一つの方向へ向かい、よりそだけが悲しみを露わに、トマリだけが垢抜けて開いた顔をしていた。罪悪感はなく、トマリはよりそとのこれからのことだけを考えていた。手に滲んでいる罪とは比べられるほど、トマリは前を向いていた。

電車を降りると、よりその時間だった。街頭は少なく、目指すべき場所までよりその手を取り導いた。駅には人の気を感じられなかった。ストーブが一つ、音を出して火を燃やしていた。車掌は定款を抱いて二人を見つめていたが、何も語らなかった。駅を出ると雪が浅く積もっており、全ての音を吸収していた。

最終バスを捕まえて山へ向かった。町をゆく間は乗客がいたものの、次第に人が一人ずつ減っていき、山に入る頃にはトマリたち二人だけになった。窓の向こうを眺めても闇が何層にも重なっているのが見えただけだった。よりそは泣き疲れて眠りついてしまい、トマリに身を預けていた。より素は質量を感じさせないような軽さで、衣服の隙間から見えるその腕の細さを、トマリは直視できなかった。代わりに彼女の身体が凍えぬように手を握ってやった。バスはタイヤとエンジンの音が響き、微かによりその寝息が聞こえた。木目の床に雪解けが混ざり、熱気で車内は潤っていた。バスのフロントライトが山の闇の裂いて進んだ。山上へ登っているはずなのに、深い闇に潜っているようだった。闇は裂いても裂いても流動的な動きで元どおりにその場を包み飽和していった。戻り道を少しずつなくしていった。

よりそは行き先を知らない。運転手とトマリだけがそれを知っていた。よりそに倣って、トマリも目を瞑ってみた。振動がより鮮明に聴こえる。よりその手を同様に感じた。トマリはずっとこのままバスに乗っていたかった。どこにも着かずに二人でまどろみの中で、移住を続けるような自由を得たかった。光を憎み、終着点を恐れた。

山の八合目のあたりでバスは止まった。そこがバスの果てだった。駄賃を払って降車して周囲を見回した。運転手は物言いたげだったが、それ以上にくたびれているようだった。二人を下ろすとすぐに扉を閉めて発車した。

駅よりも積もっている雪は夜目に青白く、心地良い冷たさだった。よりそは依然暗い表情

のまま手を取られ、二人で歩き始めた。ほぼ山頂に等しい、平地を貫く雪道を歩いた。周囲を阻むものは何もなく、一面に広がった雪をから反射する微かな月光に、よりそはマフラーで口元を隠した。さつきよりも強く、よりそはトマリの手を握っていた。よりそは行き先を聴こうとはしなかった。小さな木造の小屋に辿り着いた。

鍵を取り出して扉を開いたが、明かりはつけなかった。よりそが入ると、トマリは扉を閉めた。完全な闇が生まれた。よりその世界だ。月光に焼かれた目を冷まし、闇に慣らした。

「別荘だ。昔、祖父が使っていたんだ。療養だね。今は消毒されているから問題ない。誰かが来ることもないだろう」それからトマリは謝った。

「いつかこうなるだろうと思っていたし、そうわかっているが黙っていた」

「あなたが謝る必要はありませんよ。私だって、この状況に安堵していないと言えば、それは嘘です」二人で寝室に向かい、部屋の隅に荷物を下ろした。外套は玄関にかけた。

「私は今も、これからも、あなたに人生を譲っていますから、謝るのは止してください」トマリは黙って頷いた。

光の一つもない家の中であっても、二人は全てを見ることができた。押し入れから布団を取り出して敷いた。時計を見ると、ちょうど日付が変わる頃だった。どちらからともなく横になった。それからこれからのことを考えた。行きたい場所のことを考えたが、金のことも家のことも食事のことも考えていなかった。二人とも、お互いの終着点のことだけを考えた。

「なんだか不思議だ」

「何がですか？」

「まだいくらかしか会ったこともないのに、これだけのことをやって、これからもいたいと思ってる」

「兄を殺してしまうほどに？」

「そう、殺したって良いと思うと思う」

「重いですね」よりそは軽く笑った。闇の中でも鮮明に見える。

「君は嫌？」

「暗闇よりも重くたったって構いません」

よりそを苦しめる朝はトマリにとって敵だったが、その時ほど強く思ったことはなかった。よりそを殺さんとする光という光を全て浴びて防ぎたいと思った。ずっと夜にいたかつ

た。俺達を日の元へ晒さないでくれ、誰も見つけなくてくれ、考えなくてくれ、と思った。その全てを二人だけでやりたいと思った。闇はよりその一部で、トマリの一部にもなっていた。それを通じて二人は繋がっている。

Span-b-25

異変があったのは日が昇った頃だった。強烈な痛みからトマリは目が覚めた。傷んでいる部位と原因を眠った頭で探し始めたが、それはできなかった。というのも、身体全身に苦痛を感じていたからだ。最初は一過性のものだと無視したが、次第に痛みは増し、頭は割れるように痛み、吐き気を催し始めてから、布団を出ようとした、が、身体を動かすのも苦痛だった。全身が熱い。そこまでしてやっと、自分の身に何かしらの異変が起きていることを自覚した。

身体を掻き毟っても何も変わらなかった。とにかく何かをしなければ、と思い立ち決死の思いで起き上がった。平衡感覚をなくして視界が揺らぎ、しかし倒れまいと足を踏み込んでいった。小屋の中は閉め戸の隙間から忍び込む光で朝の予感を滲ませていたが、それどころではなかった。

床を軋ませて水道へ向かい、蛇口を捻ろうとしたが、力が入らなかった。肘をぶつけて両手を駆使し、何とか出てきた水を手でうけて口に含んだ。しかし何も変わらなかった。その場で座り込み、腹を抱えた。それも意味をなさなかった。身体中の皮膚という皮膚が痛み苦しみに悶えていた。それも弱まることなく、なすすべもなかった。

水音に気づき、よりそが目を覚まして水道でへたり込むトマリを見つけて駆け寄った。トマリは過呼吸のように浅い息を吸っては吐きを続けていた。

「どこが苦しんです？」よりそが訊いても答えられなかった。何か薬を持っていなかったかと、床を這いずるようにしてまた進み始めた。床はうっすらと埃が地層のように堆積しており、薄汚かった。木目のふくらみを越えるのも煩わしく、しかしトマリはゆっくりと進んでいった。

道すがら、窓の隙間の朝日を浴びて止まった。よりそは何も分からずにトマリを追っていた。泊まりは方向を変え、窓へ寄って行った。閉め戸は立て付けが悪く、非力なトマリは開けるのに苦心したが、それを見てよりそも手伝った。突然思っきり閉め戸が開き、小屋の中に光の塊が入った。よりそは声を上げて光を避けたが、泊まりは避けなかった。そのまま

太陽を直視していた。

それがどれぐらい続いていたのかわからなかった。トマリの視界を太陽は焼いていったが、トマリはまばたきも動きもしなかった。涙が流れていることに本人さえも気付いていなかった。光の中では、光を受けているところは苦しみから解放されていたのだった。トマリの身体を焼いていたのは影だった。

それからずっとトマリは光の中にいた。苦痛は引いていったが、依然として影を帯びている部位は苦痛が襲っていた。何をすればいいのかわからず、よりそは影の中に、トマリは光の中に佇んでいた。お互いかけ合えるべき言葉を見失ってしまっていた。

二人は真っ先に死を予感したが、それは正しかった。光はいくらでも遮断することができた。しかし……。

「今すぐここを発ちましょう。お医者さんに診て貰えば、どうにかなるかもしれません」
「日中に雪原に行くのは危うい。無理だ」

「私の心配をするのは止してください」場は膠着したが、しかし泊まりにもそれしか手段が思いつかなかった。それどころか、解決策もないように思われた。

最終的に、荷物をまとめて小屋を出ることにした。よりそはいつも以上に防御を備えたが、トマリはどうすればいいのかわからなかった。

「服を着ないわけにもいかない、凍死するのは避けたいから、行きと同じ格好で行くしかない」よりその緊張が手にとるようにわかったが、トマリはそれを無視した。服を着ることは影を纏うのと同義だった。誰しもが影を纏っている。

よりそがトマリに服を羽織らせると、身が硬直したのを感じ、よりそも硬直した。

「続ける」と言われ、よりそはそのまま羽織らせ、トマリは再び苦痛の間に吞まれていった。それから立ち上がり、意を決するまでに時間がかかった。一息、二息と深呼吸をしてから、やっと立ち上がった。素知らぬ素振りの中によりそは苦悶を見逃さなかった。

外に出ると、雪が降り始めていた。よりそには好都合だったが、それでも周囲は白昼夢のようにうっすらと仄暗く、雪の白色が輝いていた。その乾き冷えた空気はトマリの身体に刺さり、再びトマリの意識を朦朧とさせた。

それからゆっくりとした歩調で二人は歩き出した。雪原は広く、逃げ出せるような暖かさなど近くにはなかった。雪原が地平線のように広がり、その上に蜃気楼のように背の高く黒い木立の群れが視界を覆っていた。雪の足は次第に強くなっていき、足並みは乱れ、小さくなっていった。トマリ達の足跡は数分後には埋め尽くされ、やがて小屋を飲み、木立を飲み、

ただ前進することしか許されなくなっていった。

木々の間の細道に入ると雪の降りは防げたものの、依然として積雪が酷かった。一步步ごとに足に伝わる重い歯応えのような感触は疲労を増幅させ、より二人を苦しめた。トマリはよりそを心配かけさせまいと、進んでいったが、それも限界だった。身体の中の内臓という内臓が全て溶け合って混ざっていく感覚に襲われ、歩くたびに不快感と内臓がより複雑に混ざり合っていた。限界はとっくに超えていた。新体重が針に刺され、血が流れているような錯覚に怯えていた。身体中の部位が重くなっていった。

よりその呼吸も乱れていった。鼻水が流れていることも気づかず流れるままに任せていた。トマリは、というと、今度は眼球の裏からモノに押されるような圧迫感と闘っていた。

バス停までにまだかなりの距離があった。昨晚、自分たちがこの道を行ったことが信じられなかった。もしかすると、どこかで道を間違えているのではないかと不安になったが、しかし道標は正解を示していた。

雪は依然として降り続けていたが、二人の足音とどこかで雪の塊が木から落ちる音以外は何も聞こえも香りもしなかった。そのはずだったが、どこからか、別の足音が聞こえてきていた。

トマリは最初、それは幻聴かと思っていたが、それは少しずつ大きくなり、どんどん二人に近づいていっていた。そんな中でも、相変わらず身体は影に蝕まれていった。

いったん、足を止めると、よりその足も気づいたように止まった。よりそは今にも眠りに落ちそうだった。周囲を見回した。相変わらず雪で視界が悪かった。しかし二人の後ろの、来た道から、誰かが来ていることに気づいた。三、四人ほどの、複数人の影が見て取れた。

トマリは今まで、影に食い殺されるよりも先に、雪に殺されると思っていたので、少し安心をした。しかし、弱った身体と頭で考えていくうちに、大きな過ちであると気づいた。その集団は救助などではなく警察だった。人殺しを捕まえに来たのだ。どこから、いつやってきたのだろうか、と、思考がそこまでいくと流石に頭が冴えてきた。

よりそは立ち止まっているトマリを不思議がっていると、トマリは一言だけ言った。「警察だ」サツとよりそが怯えたのを感じ、振り返ったが、もう二人にはなすすべもなかった。しかしそれでも二人はまた歩き始めた。

いくつもの足音が山の細道を響いていたが、二人の足音は乱れ、後ろからやってくる足音は常に規則的だった。

